

# 【入選（中央審査）】「水の作文大賞」

「水と生きる」

熊本県 真和中学校

3年

杉本 すぎもと 周優 しゅうゆう

「冷たっ！」

ある夏のことだった。僕は冷えた野菜を手に取り、思わず声が出た。僕の家の近くには小川がある。その水で野菜を冷やしていたのだ。その小川には鏡ヶ池という池から出る湧き水が引かれていてとても冷たく、綺麗だ。鏡ヶ池は観光地として有名だがその奥には観光客の目につかない小川が続いている。そこではその小川の水を利用した地域の人たちの生活が根付いているのだ。人々はその小川の水を使い野菜を冷やしたり、家の玄関の掃除、植物への水やりなどをしている。そして、僕も冷やした野菜でサラダを作る。小川で冷やした野菜を使ったサラダは普通のサラダよりも一段と色鮮やかに見える。

「おいしいう！」

僕はそう言いながら家族と食卓を囲んだ。そう、この小川の水は僕たちの生活の一部であるのだ。水の使われ方はこれだけではない。子どもの遊び場や地域の人々の交流の場にもなっているのだ。実は野菜を冷やす場所には小屋があり、さらにそこから小川とは別に水が引かれていて、水遊びができる場所がある。小屋では大人たちが冷えるのを待ちながら会話をし、水遊び場では子どもたちがはしゃいで遊ぶ。そこでは子どもから大人まで幅広い年代の人々のふれあいが見受けられる。これが僕の住人である地域の交流の在り方だ。

ある梅雨の時期のことだった。その年は例年よりも雨が多く降り記録的な豪雨となった。僕は不安な日々を過ごし梅雨が明けると、思いもよらぬ景色が広がっていた。小川には泥が

溜まり、水遊び場も泥だらけになっていた。到底小川の水を使えるような環境ではなく、地域の人たちは驚きの表情だった。しかし小川の水は地域の人たちの生活の一部だ。使えなくなっては困る。そこで僕たちは話し合い、急いで掃除をすることに決めた。小川の泥を取り除き、水遊び場は一度水を抜いて綺麗に掃除した。みんなで役割を分けることで、早く終わった。久しぶりに小川に綺麗な水が戻ってきたのだ。

「疲れた〜」

みんなはそう言いつつも、綺麗な水を見て嬉しそうな顔をしていた。それからはいつもの生活が戻ってきた。皆楽しく会話をし、また野菜を冷やす。

僕はその出来事から水の身近さを改めて感じた。なぜならこの豪雨をもたらしたのも水だからだ。僕たちは水を普段から有効活用しているが、水害の影響も大きい。津波や土砂災害、川の氾濫など、水は僕たちにとって脅威にもなり得るのだ。さらに最近は地球温暖化によって異常気象も増えている。そのせいで水害の被害が増えるのは避けたい。そのため僕は水を使ってばかりではなく、水をコントロールすることが必要だと考える。なので水害対策について調べてみたところ堤防や放水路などの川の氾濫を防ぐものや、調整池や雨水貯留管などの雨水を一時的に溜めるものがあることが分かった。そこで人々にこの取組みを広く認知してもらい、水と共に生きるという考えを持って生活してほしいと思った。